



発行 2013 年 9 月 30 日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

ハンザキの卵を食う者たち

ハンザキ橋下流側にあるアンコ淵の繁殖巣穴では、今年も繁殖に成功した。今月の 7 日頃からハンザキの出入りが頻繁に見られるようになった。夜間照明のままでモニターを見ていると黒主と他の 3 個体のハンザキが出入りする。8 日には下流 2 ㎞程の簾野地区の自然の巣穴で産卵が確認された。10 日には周辺で 5 個体を確認したが、全てオスで内 1 匹は首に咬み傷を受けていた。11 日、夜間のモニター観察で 6 個体のハンザキが巣穴に入ったり出たりを繰り返す。黒主も同じような行動を取っているがなぜだかよく分らない。黒主を捕獲して測定。残念ながら全長は 99 ㎝のままだった。おまけに、オスの活性化を示しているだろうクロアカ周囲の隆起が見られない。そして、夜間に繁殖パーティは終了した。果たして黒主はデンマスターの役割を果たすのだろうか？



ハンザキの卵に集まったイモリ（大きな腹だ）

黒主は卵を護っているようだ。クロアカの隆起が無くてもいいということなのだろうが、あれでは受精に参加できなかったのではないかと思う。そう言えば、1976 年に初めて見つけた巣穴で産出したばかりの卵を護っていたオスもそうだった。当時はメスが卵を護るかもしれないという考えもあったので、解剖して確認すべきだという意見もでたが到底そんなことには賛成できなかった。その後、夜にビールを飲みながらパソコンの画面を見ていたら黒主ではない個体が穴に入り、口からはみ出すほどの卵塊をくわえて出てきた。すぐに飛び出して捕獲を試みたが逃げられてしまった。呑みこめない塊を振り回して食いちぎっていたので、残りを網の中に入れて川に浸けておいた。翌朝回収に行くと卵に 3 匹のイモリが食らいついていた。全く野生の生き物は油断ができないと考えさせられた。



写真 1 刺身のつまのヤナギタデが生長しました



写真 2 校庭の砂山でイシガメが産卵



写真 3 1 卵だけ残されていたイシガメの死卵



写真 4 ポンプピットのゴミ除け



写真 5 増水の円山川を流れる牧草の袋



写真 6 人工巢穴に空気を送るためのソーラー



写真 7 ツチアケビを見つけました



写真 8 ハンザキ橋に引っ掛かった大流木



写真 9 流木の撤去作業



写真 10 円山川支流の田路川調査



写真 11 今年最後のハンザキ夜間観察会は屋外で



写真 12 銀谷まつりで“いくのん”の訪問

食材の偽称について

一流と言われるホテルやデパートなどで食品の材料を偽っていたことが分って大きく報道されると、次々に内部告発やこの際「みんなで白状すれば怖くない」とばかりに、多くの事例が明らかにされた。まあ、中身を知らずに名前だけで満足して食べていた方が幸せだったのかもしれないが、名前につられないことが大切だと思う。ただ、牛肉に脂肪を注入したりしているというようなことが露わになると、いやになってくる。疑い出すと切りが無いのかもしれないが、ハンバーグとかハムなど何が入れているのか気になってくるのだ。魚の養殖では粉末サイズから口の大きさに合わせたサイズのペレットなどと言う形で人工的な餌が開発されている。早く大きくするために脂肪分の多く含まれた餌を食わされた“油アユ”(当ニュース 90 参照)は、本物のアユではないと思うのだが、それしか食べたことが無ければあれがアユだと思ってしまいうだろう。

ところで、偽称ニュースの中で“サーモン・トラウト”(ニジマス)の話が出ていた。サーモン(サケ)とトラウト(マス)を合わせたネーミングなのだろうがちょっと複雑な思いである。そもそもこれらは皆サケの仲間(鮭鱒類)であるということで、学問的な分類学とは別物だと思う。塩ジャケは、一時に大量に漁獲されるので保存のために塩漬けにされたサケ(シロザケと呼ばれることもある)の加工品だ。サケは産卵のために 4 年前後の海洋生活を終えて自分が産まれた母川に戻って来たところを漁獲される。現在売られている“塩ジャケ”が全て“サケ”(シロザケ)なのかどうか、袋の原材料の所を見てみると色々な種類のサケ類が加工されていることが分る。そもそも、サケと言う標準和名はあるがマスは無い。日本魚類学会編纂の日本産魚名大辞典(1981)によればサケ目には 4 亜目があり、サケ亜目に 4 科が分類されている。キュウリウオ科、アユ科、シラウオ科、サケ科である。

さらにサケ科にはイトウ属、サケ属、ニジマス属、イワナ属の 4 属に分けられている。学問的には“界・門・綱・目・科・属・種”という単位があるということだが、“サケ”と言ったら“サケ目”の魚類すべてを含むのか“サケ亜目”に属する魚なのか、種としての“サケ”だけを示すのか決まりは無いのだから偽称と言うことにはならないのではないかなと思う。皆さんは“クジラ”と“イルカ”は別の動物であると思っていることでしょう。しかし、“クジラ目”に属する同じ生き物なのである。鯨の研究者である西脇昌治先生の名著“鯨類・鰭脚類”によれば髯鯨亜目(歯の代わりにプランクトンを濾し取る髯を持つ)3 科 11 種(ナガスクジラやイワシクジラなど)と歯鯨亜目 10 科 65 種(マッコウクジラやイシイルカなど)に分類されている。一般的には大きいものをクジラと呼び小型の種をイルカと言うことが多い。また、背びれがあるのがイルカだと思う方もいるだろう。瀬戸内海など内湾性のスナメリは、最小の鯨類と言われ全長が 2 m にならないネズミイルカ科の動物だ。背びれが無いのでスナメリクジラと呼ばれることもある。日本では南極海の捕鯨とは別に沿岸小型捕鯨がおこなわれており、バンドウイルカやカマイルカなどが漁獲され、その肉はクジラとして流通している。これは偽称ではないのだが、名前は“イルカ”なのだ。“タラコ”もタラの卵ではなく“スケソウダラ”の卵巣である。さて、どう考えますか???

円山川支流田路（とうじ）川のハンザキ調査

今年は朝来市教育委員会からの委託を受けて、市内の水系のハンザキ分布調査が始まりました。私は主に市川の上流部である生野ダムから源流部までの調査をしてきました。ハンザキ研としてもできるだけ多くの河川の現状を把握したいのですが、夜間調査ではなかなか思うようには守備範囲を広げることができません。主調査域でも当初は魚ヶ滝周辺で、次いで簾野地区の繁殖期に重点を置いた調査、次がハンザキ研を立ち上げてからの周辺の水域、そして夜間観察会がやりやすい場所としての最上流の黒川本村地区と 4 か所を中心に支流の横谷・青草谷・柏谷・滝谷・長野川・高路川・梅ヶ畑川などにも調査に入りました。

市教委が市内のハンザキの現状を記録していきたいということで予算を確保してくれたのは素晴らしいことだと思います。これまでは河川災害復旧工事に伴う事前調査などでわずかな期間と範囲の実態しか分っていないからです。初めての水域へ夜間に調査に入るわけですから、地域の方々への周知をきちんとやらねばなりませんし、漁業組合の許可もいただかねばなりません。密漁者が時々現れるようで大騒ぎになるからです。車にパトライトをつけて、調査中の幟旗を掲げての夜間調査です。河川に対する状況把握も必要なので明るい内に下見をしておきます。道路から見る田路川はほとんどがコンクリート 3 面張りになっていました。かなり河川が暴れて防災工事が徹底して行われてきたようです。同行していただいた漁協の役員さんや市の文化財保護審議員の方々などと 10 名ほどが 2 班にわかれて実施することになりました。

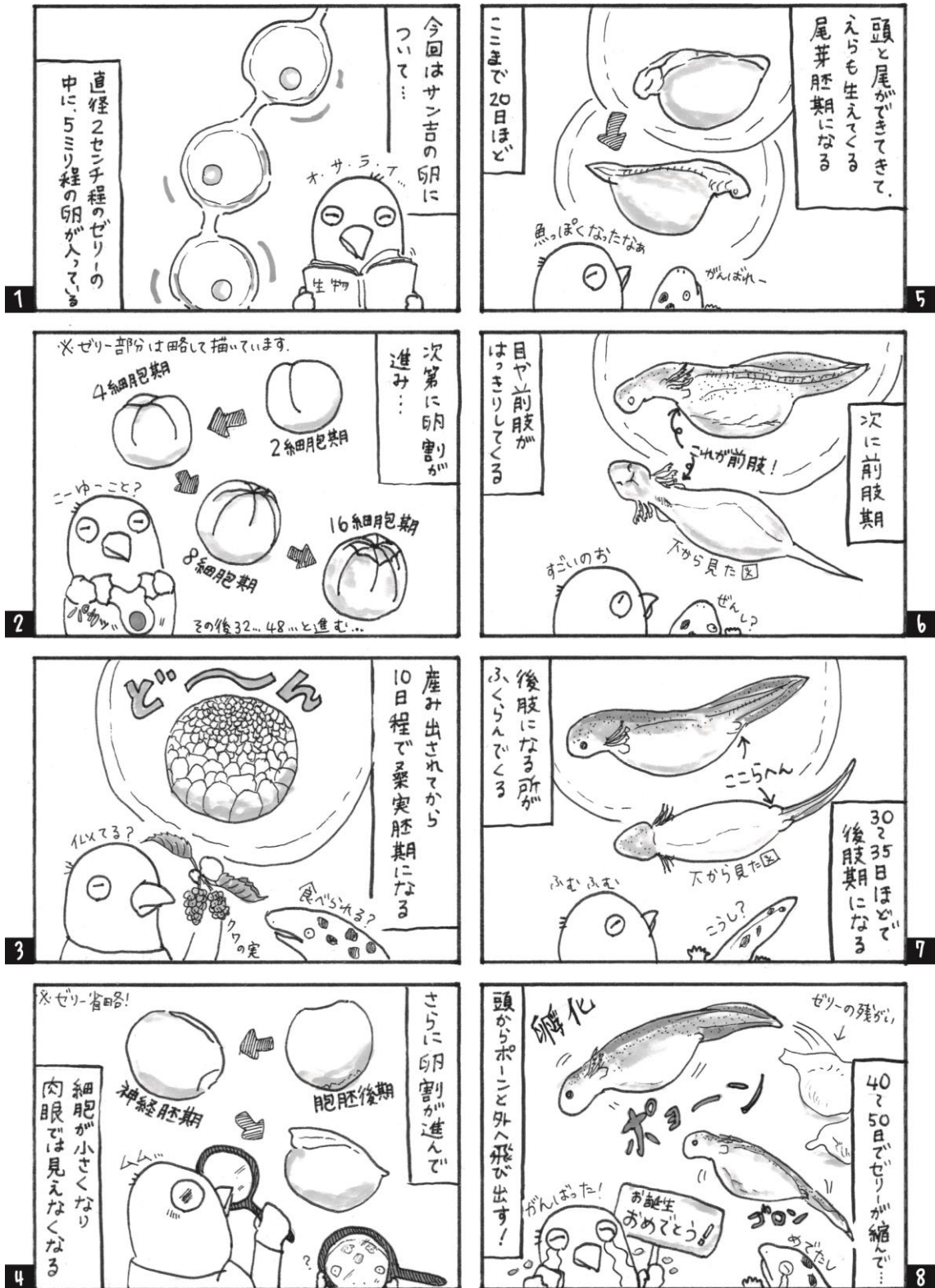
実際に川の中に入ると岩が動きません。よく見ると周囲に砂が堆積して隙間のある浮き石がほとんどないのです。これでは護岸はコンクリだしハンザキが身をひそめる空間が無い状況です。2 時間の踏査で出現は無く、河川内生物もほとんど見ることはできませんでした。石がグラつかないので歩き易いのですが、何も出てきてくれないので疲れます。このあと 10 月にも調査に入りましたが、同様の結果に終わりました。ハンザキが生息していないとは断定できないのですが、住みにくくなった支流から本流へ逃げ出したのかもしれませんが。川のほとりにある兵庫県内水面漁業センターの情報では生息が知られているとのことでしたが、残念なことでした。

この第 2 回目の調査には、英国の動物学協会のチュウゴクハンザキ保護チームの 3 名がオブザーバーとして参加しました。田路川では夜のハンザキを見ることはできなかったのですが市川に戻って数個体を捕獲、測定の現場を見てもらいましたが、女性のベッキーさんの元気な様子には感心させられました。実は、ハンザキの繁殖は 9 月が中心なのですが、10 月の下旬に繁殖集団が目撃されたのです。どうも、上流のダムからの水が温度が高いために 10 月になってやっと 20 度を切ったところで繁殖行動を開始したと考えられました。ハンザキ研の水温より 3 ℃ しか上流にもかかわらず、5 度も水温が高かったのです。これは、今後の調査によって確認していかなければならない新しい事実のようでした。



今回は
はちこま!

その23 卵の発生



サン吉: オオサンツヨウオ
川にぞう王さまである



トリ子: トリ聖宇宙人
地球を征服するべくサ吉の
生命をさくらっている

アメリカのニューヨークを怖い街だと他人は言うけれど、、、

会員 上田 洋

今から 30 年程前の事です。入社 10 年目を迎えた頃勤めていた業界（貨物運送業）では未だ景気が良い時代の名残るか、一部の航空会社から我々業界の中堅社員を対象とした会社経費負担の海外研修がありました。

ある時、某米系航空会社から海外研修招待名目で当社は運よく私を含め合計 3 名が参加をする事になりました。参加した海外研修は約 1 週間の日程で、ニューヨーク、シカゴ、ロスアンゼルスと航空会社の本社があったミネアポリスの 4 都市を訪問するものでした。

ニューヨークを訪問した際「自由時間」にその当時マンハッタンのエンパイアステートビル近くにあった当社駐在員事務所へ午前中表敬訪問し午後は、同僚 2 名と駐在員から貰った「お手製の地図」を片手にマンハッタンを散策しました。夕方に JFK 空港近くの宿泊先ホテルへ帰るためタクシー（イエローキャブ）をひらい宿泊先ホテルを告げ「さあ帰るぞ～」とタクシーが走り出したところ、一人の同僚が北へ走るべきところ、南へ向かって走っているのを通りの名前を見て気付く「小声」で私に言いました。三人の中で少しでも英語が話せるのが私一人だったからです。「行く方向が逆みたいだけど、運ちゃんに聞いて!」。通じるかどうか不安なカタコト英語で運ちゃんに聞いたところ、北方向へ走ると通勤のラッシュアワーに巻き込まれるので南へ走ってから橋を渡って JFK 空港方面に行く・・・と。

暫くして同僚が今運転している運ちゃんと車の ID カードの写真が別人だと言いました。

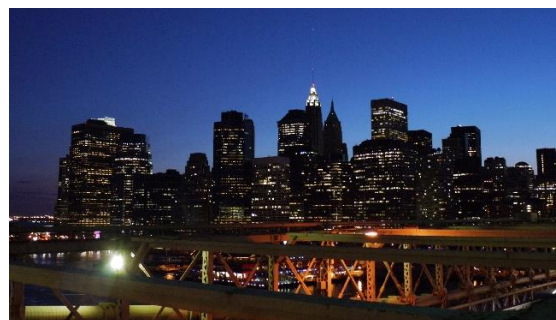
夕方で周囲が少しずつ暗さを増した頃、我々を乗せたタクシーは「夜のセントラルパーク」へと突入しました。セントラルパークやハーレムは「絶対行くな!」と駐在員から言い渡されていた場所です。同僚に脇腹を突つかれながらカタコト英語で何処へ向かっているのかと聞いたところホテル方向への道路を走っていたので安心しかけたら、今度は「夜のハーレム」に突入してしまいました。

ああ、とうとう「ホールドアップ」やなどあきらめかけたら、「夜のハーレム」では赤信号でもタクシーは徐行こそすれ「一旦停止」でさえせずに突き抜けて走っていました。

ほっとした次の瞬間、タクシーが暗い路地へと曲り「ああ、万事休す」と覚悟を決めたが、その時目前にブルックリンへ渡る橋に出て、何とか無事に JFK 空港近くのホテルへと帰りました。

私達が行った頃のニューヨーク・マンハッタンは「タクシーによるナイトツアー」等無い時代で、ホールアップにも会わず今では笑い話となりましたが、実際に運転していた運ちゃんはともかく「イタリア人風」で車の ID はともかく「黒人風」でした。

無事にホテルへ帰った後、同僚からは運ちゃんの英語が良く理解出来たなと感心されましたが、ほとんど何も聞き取れなかったと言ったら、冷たい眼で見られたのも「楽しい思い出」のひとつです。



ハンザキ研日誌

2013年9月

- 1 日 東京都井の頭自然文化園の大橋・金原両係長下見に在所
- 3 日 台風 17 号の大水で被害(ポンプピットのゴミ除けなど流失)
- 4 日 ・北近畿自動車道委員会(豊岡市にて)雨天下で現地視察も実施
・ハンザキ橋に根付きの太木が引っ掛かっていた
- 8 日 ボランティア作業(ポンプピットの整備など)
- 10 日 ホームセンターで資材調達
- 11 日 ・兵庫県養父土木によるハンザキ橋の太木の撤去作業
・夜間アンコ淵の巣穴に 6 個体入る(産卵した様子)
- 12 日 ・キノコ定期定点調査(横山先生など 4 名)
・ソーラー発電の試運転
・釣りビジョン社の取材(釣りだけの番組放映テレビ会社)
・浄化槽の清掃
- 15 日 公開見学会、雨天にもかかわらず 5 組 13 名参加、スタッフ 4 名
- 17 日 ポンプピットの浚渫作業実施(今月 2 回目)
- 18 日 兵庫県自然環境課・環境審議会(神戸市にて)
- 20 日 神戸大学・森川研究室 7 名見学に
- 24 日 上水貯水槽が空っぽになる(ボールタップの目詰まり)
- 25 日 アケビ開果
- 26 日 円山川自然再生推進委員会・現地視察(豊岡市にて)
- 27 日 ・朝来市から受託した円山川支流の田路川夜間調査、8 名
・予約見学 8 名
- 28 日 ・事務局会議 9 名
・オオサンショウウオ夜間観察会 67 名参加、スタッフ 10 名
- 29 日 銀谷まつりへ協賛出展、ジャンボ・ハイブリッド・ハンザキと

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

ハンザキ研ニュース発行の大幅な遅延で申し訳ありません。と、また言い訳から始まったツブヤ記録ですが、現在 8 か月も遅れてしまいました。これほど遅れたのは初めてのことですが、時間があくほど興奮が冷めてしまい、当時のことを思い出すのが難しくなってしまう。最新のニュースを我が脳味噌のシャンとしている間に書き留めていかないとますます記憶が薄れてしまいます。今回は事務局員の上田さんに初登場していただき、動物の空輸業務の中からのお話を書いて頂くようお願いしました。